



私の留学日記

教育学部外国人研究生 王 志 松

您好！今日は！

您好！今日は！

私は、日本の国土に踏み入った最初の時、自分が外国に来たという感じをとらえようと努めたが、無駄であった。中国で四年間日本語を勉強したおかげで、言葉は大体通じるし、夜の町のひらめく色とりどりの広告や看板などを見わたしても、読める漢字と、中国でもやはり読めない英語ばかりであったから。それに、日本人も自分と変わりなく黄色い皮膚と黒い目であった。しかし、日本で生活すればするほど、日本人と日本という国を理解し、親しむ一方、また、文化背景の異なることによる誤解と苦悩をしばしば余儀なく体験させられた。このような体験を、時には日記にも書いた。日常生活の事ばかりだから、平凡と言え、平凡である。しかし、いずれも自分の留学生活の実感なので、「日本の印象について」を書くかわりに、ここで三篇抄録させていただこう。

その一

今日は快晴。日本語日本文化研修コースの留学生は先生達と一緒に宮島へ紅葉を見に行っただけで、せっかく楽しかった一日であったが行き帰りで何回も車に乗りかえたため、だいぶ興ざめた。特に、朝寝損なって、起きたのは遅くなった。急いで、バス停に行ったら、バスはなかなかすぐは来ない。いらいらしていると、中国では外国人留学生が集団旅行をする時、学校側は必ず専用車を出すだろうと、思ったりした。自分でもよく分からないが、どうしてあそこまで思いついたのか。とにかくそう思うと、自分も日本政府の国費留学生なのに、中国での留学生と同じような待遇を受けられなかったことに対して急に腹立たしくなった。幸いに、しばらくしてバスが来た。バスに乗ると、気分がすっかり晴れて、さっきの考えを馬鹿らしく思った。天気

もいいし、景色もすばらしいから、不愉快な事を忘れないはずはなかった。しかし、夜、家に帰って、ふと午前の事を思い出されて、急に自分は自分をいやになった。中国では、外国人に対していろいろな格別待遇がある。中国は、まだ発展途中の国であるから、観光や留学や仕事などに来た外国人に対してある程度の便宜を提供することは、別に非難すべきものではないが、実際、必要以上の格別待遇をしている場合は少なくない。自分は、常に不平に思ったり、不満もこぼしたりしていた。けれども、自分は日本に来て、いったん外国人留学生になった場合、またこのような格別待遇を無意識的にもひそかに望んでいる。果たして、これは本当に中国人であるからこそその発想なのであろうか。

田中さんは、小柄で、可愛い日本の女学生である。どこか中国人に似たようなところがある。中国人留学生の李君は、それを彼女に言ったら、すごく喜んでいて。おもしろいことには、彼女自身が小さいころずっと中国人になりたいと思ったこともあるそうである。「あなたの祖先は中国人かもしれません」と、李君がふざけると、「そうかもしれません」と彼女は賛成した。中国人になり損なった後悔のせい、今、中国語を一生けん命勉強している。私達に会うたびに、必ず和風な中国語で挨拶してくれる。李君は時々彼女の中国語の発音をからかっていた。「じゃ、正しいのを教えて。」と彼女は言っていて、まつ毛の長い目をつまばたいて、真剣そうに李君の顔を見つめた。李君は、結局その大きい目に弱って、からかいをやめて、彼女の発音を直してあげた。いつのまにか、李君は田中さんの中国語の個人教師になった。

今日、ふとしたことで、田中さんのクラスメートの口から、田中さんには恋人があるということがばれた。これを聞いた時、李君は、目を丸くして「ほんとう」と叫んだ。叫び声が高すぎたため、みんなどっと笑った。李君はすでに恋の淵に落ちたとは思わない。彼がもう結婚していることは誰でも知っている。ただし妻は今国内にいる。李君はなぜ驚いたか、私ははっきりとは言えないが、同じ若者としての直感で彼の驚きを理解しえた。たとえば、愛するまで至っていないが、親しくつき合っている女性が他の男性を好きになったことを知った時、その男性に対してなんとなく細やかな嫉妬がわいてくるのであろう。李君の場合もそういったようなものではなかろうかと、私は勝手に推測した。みんなに笑われて、李君もはにかんだ。自分のろうばいをごまかそうとして、またわざと「ほんとう」という叫び声をさらに高く上げた。みんないっそう大笑いをした。その瞬間、私は一種の感動に打たれた。これは、ただ若い男女間の微妙な感情の波紋の一つにすぎないが、人間であるだけに、国境を越え、人種を越え、心と心の通じあうところが必ずあると、その時全身で感じた。そして、同じ人間である以上、このただ一つの地球の上で一緒に仲よく生きなければならないとも思った。

その三

ゆうべ金君の「復しゅうパーティー」に参加した。なぜ「復しゅうパーティー」と名づけたのかというと、彼はいつも隣の人に夜遅くまで騒がれて、なかなか眠れないから、「よし、おれも仕返ししてやろう」という意味からきたそうである。留学生も日本の学生もみんな彼の不幸に同情して、彼の部屋に集まって、しっかりと騒いでやった。しかし、残念なことに隣の人はちょうど留守であった。結局、復しゅうすべき対象がなくなって、その復しゅうの炎が無分別に同じアパートの他の住居者を焼いていった。パーティーは10時半から始まったので、12時はちょうど最中であつた。二時にもまだ元気に話したり、笑っ

たりする人がいた。とうとう聞きかねて、警察に電話をした住居者が出たらしい。というのは、一人のお巡りさんがアパートの周囲をのろのろと巡っていたからである。金君は、食指を口に当てて「シー」と言うと、みんなは喧擾をやめた。そして、いっそうのこと、電気も消した。しかし、闇の中で30何人もの人がじっと座っていると、どうもどこかおかしい感じがしてきて、とうとう誰か耐えかねて吹き出してしまったのをきっかけに、一堂大笑いをした。笑い声や話し声は前より盛り上がった。トントンとノックする音が聞こえてきた。「しまったな」という感じにおそわれて、みんなまた黙った。部屋は急に何か危険状態に悔んでいるような雰囲気包まれてしまった。金君は主催者であるから、どんな悪い結果になっても、自分で責任を負わなければならない。しかたがなく、ドアを開けに行こうとしたが、ある日本の学生が彼を止めた。そして「セリが出て交渉してください。お巡りさんは外人に甘いから」と提言した(日本人の言う「外人」は専ら西洋人を指すらしい)。セリは玄関に行った。セリが金髪と灰色の目を持っているかがあったせいか、お巡りさんは本当に何もとがめず、すぐ腰をかがめながら出て行った。みんなはセリをがい旋した英雄のように歓迎した。私も確かにこの戦術に感服したが、しかしその後でも出て行ったお巡りさんの姿はなかなか目から離れない。そしていろいろと考えた。日本の現代社会は全部西洋から学んだものである。だからある意味で言えば、日本の先進国は実際他の国よりいち早く西洋のものを学べたという意味である。たとえ経済ではほとんどの西洋の国を追い越した今でも、文化の面ではまだ西洋のものでわが先進性を装っているところが大いにある。他の国の長所を学ぶべきであるが、それより重要なことに自国の新しい文化も作らなければならない。そうしないと、真の意味での先進国にはなりえないのである。腰をかがめたお巡りさんの姿は、ある意味での象徴ではなかろうか。